

フッガー家のスペイン王室への貸付

諸 田 實

目 次

はじめに

一 スペイン王室との接触

二 貸付の形式

三 王室に対する貸付の事例

1 一五三六年 2 一五四二年

3 一五四七年 4 一五五二年

はじめに

本稿は、一六世紀のヨーロッパで最大の国際的な商人・金融業者であった、フッガー家のスペインにおける営業活動の中心である王室に対する貸付の実態を明らかにすることを課題としている。ただし、紙数の関係もあって考察の範囲を国王カルロス一世（ドイツ皇帝カール五世）の時代に限定する。スペインにおけるフッガー家の営業活動は、(一)、

宮廷店を中心に行ったスペイン王室に対する貸付、(二)、アルマグロ店が管理した三つの騎士修道会領の地代徴収の請負い(マエストラスゴ)とアルマーデンの水銀鉱山の請負い、(三)、アメリカ貿易の中心地に開設したセビーリャ店の商業・金融業、に大別することができる。このうち、(二)のマエストラスゴと水銀鉱山の請負いについては前稿(本誌の第三〇巻第一号)で述べたので、本稿では(一)を中心に、それに関連する限りで(三)にも触れながら、述べることにする。

前稿で述べたように、フッガー家は南ドイツの帝国都市アウクスブルクのツunft手工業者から出発し、「富豪」ヤーコプ二世(一四五九—一五二五年)の代に遠隔地間商業、鉱山業、封建的権力者に対する貸付(公信用)によってヨーロッパ屈指の国際的な商人・金融業者になった。次のアントーン(ヤーコプ二世の甥、一四九三—一五六〇年)の代に同家(「フッガー同族会社」)の財産は最大に達するが、この間にスペイン王室に対する貸付が膨張して資産の大部分を占めるまでになる。そのため、一五五七年に始まる、たび重なるスペイン王室の支払停止(「国家破産」)が引きおこした国際金融危機は、アントーン没後の一族の内紛やジェノヴァ人金融業者の進出とあいまって、絶頂期を過ぎていたフッガー家に大打撃を与え、同家の没落の重要な原因になったのである。したがって、全盛期から没落にかけてのフッガーを取り上げる場合には、同家のスペインにおける営業活動、とりわけスペイン王室に対する貸付の実態を明らかにすることが不可欠になる。

一 スペイン王室との接触

ドイツ人の商業活動がイベリア半島に達したのは一四世紀後半のことで、大西洋沿岸をポルトガル(リスボン)へ向かう海上ルートと、スイス、南フランスを通過してピレネー山脈を越え、カタロニアとアラゴンへ向かう陸上ルートがあった⁽¹⁾。海上ルートでは北ドイツ・ハンザ都市の港とリスボンとの間の海運が一四世紀の第三・四半期に始まり、一

五世紀にはプロイセンやダンツィヒなどハンザ都市の船がイベリアの特産物（塩、ワイン、コルク、乾燥果実など）を買付けるためにリスボンへ来航していた。しかし、この方面ではジェノヴァ人をはじめイギリス、フランス、ネーデルラントなど西ヨーロッパの商人の活動に較べて遅れていた。⁽²⁾

これに対して、陸路カタロニアとアラゴンへ向かったのは主として南ドイツとスイスの商人で、リヨンの大市で需要のあったサフラン（織物の染料として重要）を求めてピレネーを越えていったものと思われる。アラゴンはサフランの産地である。一三七〇年代にバルセロナでドイツ人が確認されているのが最古の記録だといわれるから、この方面でも、ジェノヴァ人その他イタリア商人の進出より遅れていた。ジェノヴァ人は一三世紀後半にはすでにアンダルシアの港町に定住し、一四世紀にはイベリア半島の銀行家としての地位を強めていたのである。

イベリア半島の東部における南ドイツとスイスの商人の活動はアルフォンス五世（寛容王、一四一六―一五八〇年）の頃に全盛期に達した。ニュルンベルクのシュトロマー、ザンクト・ガレンとベルンのディースバッハ・ヴァット、バーゼルのハルビセン、イスニーのシュパイデルなどの名前が知られているが、なかでも、南ドイツ特産の麻織物とサフランその他イベリアの特産物を交換していた「大ラーフェンスブルク会社」（一三八〇―一五三〇年）の活躍が際立っていた。この会社は一五世紀にはバルセロナ、サラゴサ、バレンシア、一時はアリカンテにも代理人を置いていた。⁽³⁾

以上のようなドイツ人商人のイベリア進出と較べると、フッガーの進出はずっと遅かった。一四世紀後半にアウクスブルクへ出て織布工ツンフトに加入し、一五世紀半ば頃ヴェネツィアとの間の商業を始めて、遠隔地間商業のシステム（中世の世界経済「レーリヒ」）に参入したばかりのフッガーにとって、イベリアは一五世紀末まで商業活動の圏外にあった。フッガーは一四九四年にハンガリー（スロヴァキア）の銅の採掘と精錬に進出し、それ以来しばしばハンガリー産の銅を、西アフリカ貿易や東インド貿易の交易品として銅を求めていたポルトガル王室に販売しているが、こ

の銅の販売が行われたのはアントウェルペンであつて、リスボンではなかつた。⁽⁴⁾また、一五〇五、〇六年にヴェルザー・フォエーリン会社を中心になつて南ドイツ商人が企てた東インド貿易にフッガーも四〇〇〇ドゥカードを出資して参加し、その直前に代理人をリスボンへ派遣している。⁽⁵⁾しかし、まもなくポルトガル国王が外国人の東インド貿易への参加を禁止したため、フッガーの東インド貿易への参加はこの一回だけで終り、また、ポルトガルの香辛料卸売の中心がアントウェルペンへ移つたため、リスボンの代理人もその後は目立つた活動をしていない。

スペインとの関係を示す事実も一五世紀末まではほとんど伝えられていない。一四九九年にスペインのカトリック両王（イサベルとフェルナンド）の娘でブルゴーニュ公妃のファナに長女エレオノーレが生まれた時、父方の祖父に当る皇帝マクシミリアンの依頼を受けて母子に上等の織物を贈つたといわれているが、多分、これがスペイン王室との最初の接触であろう。一五〇五年にサンタ・クローチェのカルバジャル枢機卿はアウクスブルクを二度訪れ、二度目に訪れた時フッガー邸に宿泊したが、彼はフッガー家が迎えた最初のスペイン人の客であつた。⁽⁶⁾

一五〇九年末のプロアの開城のち、フェルナンドが対ヴェネツィア戦の戦費をスペインから皇帝に送金した時、翌年一月にフッガーの代理人もミラノでこの受領に関わつてゐた。こうして、一五二六年にフェルナンドが死去して、ブルゴーニュ公のカルがスペイン国王カルロス一世になつた時には、フッガーはトマス・スピネリと並んでスペイン王室の送金業務に喰ひこんでいた。一五一七年の夏、ローマからネーデルラントへ向かう旅の途中アウクスブルクを訪れたアラゴンのルードヴィヒ枢機卿は、「二万人の鉞夫を雇ひ、三〇万ドゥカード（四二万グデン）の大金を動かすアウクスブルクの銀行家」とフッガーの財力に驚いて、ミドルブルフでスペイン行きの船の出航を待っていたカルロスにフッガーのことを話したという。この時、フッガーはヴェルザーと協力して、国王として初のお国入りをするカルロス一行（「外国人の大臣」と「二〇〇人の侍女と侍従」をつれた一行）のスペイン行きの旅費を引受け、フッガーの代

理人としてW・ハラールが国王の一行に同行した。⁽⁷⁾

フッガーとスペインおよびポルトガル王室との関係は、以上のように一六世紀には始まっているが、その大きな転機となったのは何といっても一五一九年の皇帝選挙であった。この選挙でハプスブルク家のスペイン国王カルロスに対するフッガーの資金援助は、スペイン王室の債務証書や王室銀行家の振出した為替手形を引受ける形で、前年の夏から何回かに分けて行われ、結局、よく知られているように、八五万グルデン余の選挙費用の六割余に当たる五四万三五八五グルデン五四クロイツァーという巨額に達した。一五二一年五月にヴォルムスの国会に出席した皇帝カール（スペイン国王カルロス）の財政担当者とフッガーとの間で、フッガーに対するスペイン王室の債務は約六〇万グルデンであることが合意され、そのうち四〇万グルデンはティロールの鉱山収入などで、二〇万グルデンはスペインの収入で返済することが約束された。⁽⁸⁾

こうして、フッガーはスペインという遠く離れた異文化の国、これまでに営業活動の経験も乏しく、営業組織も作っていない国で、しかも不穏な状況が続き、富を搾取する外国人商人に対する反感が渦巻く中で、イベリア半島の商業・金融業に深く根をおろしているジェノヴァ人と協調したり対立したりしながら、貸倒れの危険極まりない最高権力者に対する巨額の債権の回収という困難な課題を背負うことになった。その意味で、一五二一年春はフッガー会社にとって「悲劇的な運命の転回点」（ポェルニッツ）であった。ヘブラーが指摘したように、フッガーは最初から、これまでの南ドイツ商人と違って、スペイン国王であり神聖ローマ帝国（ドイツ）皇帝となったカール五世の銀行家としてスペインと接触した、といってもよいのである。⁽⁹⁾

(1) H. Kellenbenz, Deutschland und Spanien. Wäge, Träger und Güter des Handelsaustauschs, in: Ders., *Europa, Raum wirtschaftlicher Begegnung. Kleine Schriften I*, 1991; Ders., Die fremden Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel vom 15.

Jahrhundert bis zum Ende des 16. Jahrhunderts, in: Ders. (hrsg.), *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*, 1970.

(2) スペイン北部のバスク、アストゥリア沿岸では中世後期に造船業、海運業、漁業が栄え、一四世紀半ばにはカステイリヤはヨーロッパ最強の海上勢力であった。彼らはブリュージュとフランスの沿岸諸都市に居留地を作って、カステイリヤの羊毛とネーデルラントの毛織物の交換を盛んに行っていた。

(3) ディースバッハ (Nikolaus von Diesbach in Bern) は一五世紀前半に南ドイツ最大の富豪といわれた。「大ラーフェンスブルク会社」はラーフェンスブルクのフンピス家とモェッテリ家、コンスタンツのムントプラット家が設立、延べ一〇〇家族以上から出資を受け入れ、最盛期には資産一三万グルデン余、社員は八〇人、一六の支店を開設していた。商品取引に限定し、貨幣・信用取引を行わなかった。六年間の会社契約を二五回更新して一五〇年間存続した。A. Schulte, *Die Große Ravensburger Handelsgesellschaft 1380-1530*, 3 Bde., 1923. 大塚久雄『株式会社発生史論』(『著作集』岩波書店、第一巻) 後編第一章第二節。クーリッシエル『ヨーロッパ中世経済史』(増田四郎監修、伊藤栄、諸田實訳、東洋経済新報社、一九七四年) 四六五頁以下。

(4) たとえば、ネーデルラントのポルトガル商館で活躍したルイ・フェルナンデスの手紙(一五二二年四月二六日付)によると、ポルトガル国王はフッガーの代理人と一キンタル(一〇〇キロ)二八シリングで三年間の銅の購入契約を結んでいる。H. Kellenbenz, *Die Fugger in Spanien und Portugal bis 1560*, Bd. 1, 1990, S. 59.

(5) フッガーの出資額四〇〇〇ドゥカードのうち $\frac{1}{4}$ は金属、 $\frac{3}{4}$ が現金で、数名の匿名の小口出資者が含まれていた。なお、一五六一年のフッガーの帳簿にはリスボン店が記載されているが、一五二七年の決算では記されていない。諸田實「スペインの『大航海』の資金調達」(『商経論叢』二八—三) 一〇四、一〇五頁。

(6) G. F. von Pölnitz, *Jakob Fugger*, Bd. 1, S. 104 f., 194 f.; H. Kellenbenz, a. a. O., S. 62.

(7) たとえば、一五一六年にフッガーはカルロスのためにネーデルラントからインスブルックへ二万グルデンの送金を引受けている。手形はブリュッセルで振出され、送金の費用は一七〇グルデン、金額の一部分はアウクスブルクで調達されたので、その費用二六グルデンが追加された。この貨幣はインスブルックから八頭の荷馬でトリエントの陣営まで運ばれた。M. Jansen, *Jakob Fugger der Reiche*, S. 44 f. ハラー (Wolf Haller) はニュルンベルクの出身、父はマクシミリアン皇帝の財政役人であった。ハラーはネーデルラントでブルゴーニュ公であったカルロスの側近として成長し、スペイン宮廷における初代のフッガー代理人となった。H. Kellenbenz, a. a. O., S. 62 f. このほか、一五一八年にカルロスの妹カタリーナの持参金(結婚の相手はブランデンプルク選帝侯の息子)を調達している。

(8) 諸田『フッガー家の遺産』(有斐閣、一九八九年)七〇頁以下。同「フッガー家による騎士修道会領の地代請負い(「マエストラスゴ」)」、『商経論叢』三〇一—一三八—一四一頁。この間、一五二〇年一〇月にアーヘンの大聖堂で行われたカルロスの戴冠式に、ヤーコプの甥のウルリッヒがフッガー会社を代表して出席した。

(9) K. Häbler, *Die Geschichte der Fugger'schen Handlung in Spanien*, 1897.

二 貸付の形式

スペイン国王カルロス一世(在位一五一六—一五六六年、ドイツ皇帝としてはカール五世、在位一五一九—一五六六年)は四〇年におよぶ治世の間におよそ二、八九〇万ドゥカードを各国の銀行家から借入れたが、そのうちジェノヴァ人が約一、一六〇万ドゥカード、〔南〕ドイツ人が約一、〇三〇万ドゥカードで、両者を合わせると七五%を占めている。南ドイツ人の貸付の大部分はフッガーによるもので、フッガーが四〇年間にスペイン王室に貸付けた金額は約一、〇〇〇万ドゥカード(約一、四〇〇万グルデン)にのぼった。⁽¹⁾ 前述したように、フッガーはヤーコプ二世の晩年に皇帝選挙の資金援助を通して「スペイン王室の銀行家」としてスペインでの事業に進出したが、次のアントーンの時代にはスペイン王室に対する貸付はフッガー同族会社のスペインでの事業の最も重要な分野になった。アントーン没後に作成された一五六三年の決算書によると、スペイン王室に対する貸付金の残高(債権)は四五〇万グルデン(約三二万ドゥカード)で、資産総額の実に七八・五%を占めている。⁽²⁾

フッガーがスペイン王室との間で行った貨幣取引には「アシエント」(asientos)と「クレディト」(creditos)または「ソコロ」(socorros)という二つの形式があった。⁽³⁾ アシエントというのは貸付けた金額が返済されるまでの一定期間、王室の特定の収入を返済に当てるのが貸手に対して「指図」された契約のことで、フッガーをはじめ各国の銀行家の王室に対する貸付は通常アシエントを結んで行われていた。王室の収入の質入れであり、「租税の譲渡」である。当

年度の収入がすでに指図されて質入れ（譲渡）されている場合には、次年度以降の収入が指図された。一五五六年にカルロス一世に替ってフェリペ二世が王位についた時には、スペイン（カスティール）の王室収入は五年先の分まですべて指図（譲渡）されていた、ということはよく知られている。前稿で述べたマエストラスゴ（騎士修道会領の地代請負い）もこれに含まれる。これに対してクレディトまたはソコロは突発的な貨幣需要を充足するために行った緊急の無担保の貸付で、アシエントに較べて金額はずっと小さい。廷臣やカルロスの宮廷に駐在する各国の外交官を相手にした場合が多かった。⁽⁴⁾

アシエントを結ぶに際してフッガーに「指図」された王室の収入には、クルサーダ（十字軍税）、クアルタやスブシディオ（教会領からの臨時の地代）など教会領からの収入が多く、そのほかセルビシオ（特別上納金）やアルカバラ（売上税）が「指図」されたこともあった。これらの場合には王室が徴収した金額がフッガーに渡されたが、マエストラスゴの場合にはフッガー自身が修道会の領地を管理して、地代を徴収しなければならなかった。一六世紀半ばになって新大陸からの銀の流入がふえると、次に到着する予定の船団が積んでくるはずの銀が「指図」されるケースがおこった。大陸からの銀の流入がふえると、次に到着する予定の船団が積んでくるはずの銀が「指図」されるケースもおこった。貸付けた銀行家は実際に貨幣が手に入るため銀による返済を望んだが、天候の状態や海賊の襲撃などの影響もあって船団の到着は不確定であり、そのうえ、王室の貨幣需要が逼迫している場合には返済に当てるように「指図」された分の貴金属も差押えられて没収され、代りに一片の債務証書の発行ですまされる危険があった。^(4a)そこで、アシエントを結ぶ際にこの危険防止のための「保証国債」（*juros de resguardo*）を銀行家に引渡すことがあった。これは債権の満期以後貸手が特定の租税にもとづく年金を受取る年金証書（*Rentenbrief*）で、その金額は約定された貸付金の利子に相当した。

同じような危険は、フッガーがスペインの営業活動であげた利益を铸貨や地金の形で国外へ持出す場合にもおこっ

た。フッガーはあらかじめ貸付の際に貴金属の輸出許可 (sacca) をとりつけることが多かったが、この許可も取消されることがあった。たとえば、一五四八年の決算には多額の海上保険料が計上されており、ヘブラーはこれを貴金属輸送のためと解している。また、一五五四年に王室の命令で多額の現金をセビーリャからネーデルラントへ輸送した船団には、王室の分のほかに数十万エスクード (一・〇七エスクードが一ドゥカード) のフッガーの貨幣が積みこまれていた。一方、一五五六年に王室はフッガーに対する二〇万ドゥカードの輸出許可を取消し、フッガーに対して四%の補償を提示したが、フッガーは七%の補償を要求したという。⁽⁵⁾

フッガーの貨幣取引の相手は王室ばかりではなかった。スペインの宮廷に駐在する各国の外交官に対して貸付が行われていたことは前述したが、そのほか民間人を相手の貨幣取引も行った。大土地所有貴族や高位の聖職者の財産を管理したり、役人が外国の君主から支払われる年金をフッガーを通して受けとったり、資産家が確実な収益を期待してフッガーの営業に投資したりしたことも明らかにされている。ただし、王室に対する貸付に較べると民間人を相手の貨幣取引は金額が少ない。⁽⁶⁾

民間人に対する貸付やその債権の回収はセビーリャ店の記録にも多い。特に、アメリカ貿易を営む商人に貸付けた債権の回収は、債務者がアメリカへ渡航してしまった場合には困難であった。セビーリャ店の責任者はしばしば、サント・ドミンゴやプエルトリコ島の役人に取立てを依頼している。また、フッガーに対する返済金が払込まれた銀行が破産して面倒な訴訟になった場合もあった。⁽⁷⁾

王室に対する貸付やその他スペインでの営業を続けるために、フッガーは宮廷に店 (Hoffaktorei) を出して支配人を常駐させた。スペインの宮廷は、フェリペ二世がマドリッドにエスコリアル宮殿を造営するまで特定の王宮をもたず、短期間ずつ各都市を移動していた。財務会議や国庫の責任者、王室御用の銀行家もそのたびに国王とともに移動

したので、当然、フッガーの支配人も宮廷とともに移動しなければならなかった。宮廷の頻繁な移動に伴う銀行家の不便と出費を軽減するために、国王は滞在先の都市に自身と従者のための住居を用意させる権利 (Recht der posada) にもとづいて、フッガーの支配人にも住居を提供していた。宮廷がマドリッドの王宮に定着するのは一五六五年からであるが、フッガーはそれ以前からゴンサレスの家を宿舎として指定され、年一五〇ドゥカードの家賃を払って使用していた。⁽⁸⁾

一五二五年にマエストラスゴの請負いが始まると、領地の管理と地代の徴収という繁雑な仕事が生じ、これを担当する代理人がカラトラバ修道会領内のアルマグロに駐在することになった。その後一五三〇年代にアメリカ貿易の中心地としてセビーリヤの重要性がますと、セビーリヤにも代理商を置くようになる。アルマグロの代理人もセビーリヤの代理商も宮廷に駐在する支配人の管轄下にあった。宮廷のフッガー店を預る支配人としては、初代のW・ハラーのほか、J・ライインク、V・ホエルル、K・ヴァイラー、S・クルツ、J・シュテッヒャー、ch・ホエルマン、ch・フッガー、J・ヴァルターらが知られている。⁽⁸⁾

(1) H. Kellenbenz, Die Konkurrenten der Fugger als Bankiers der spanischen Krone, in: *Zeitschrift für Unternehmensgeschichte*, 24. Jg., Heft 3, 1979, S. 81, 97. エリオットは「彼〔カルロス〕は三七年間に……三九〇〇万ドゥカードを借りることができた」と述べている。J・H・エリオット、藤田一成訳『スペイン帝国の興亡』(岩波書店、一九八二年)二八八頁。ちなみに、スペイン人銀行家の貸付額は四五〇万ドゥカードで一五・六%にすぎない。

(2) 諸田「マエストラスゴ」一二八、一二九頁。

(3) K. Häbler, a. a. O., S. 118. フッガーの帳簿ではアシエントは《Handlung》と訳されている。たとえば、一五四六年の das 《Buch der Handlung der 466000 Dukaten》(四十六万六〇〇〇ドゥカード [六十五万二四〇〇〇グルデン])のアシエントの帳簿) H. Kellenbenz, *Die Fugger in Spanien und Portugal bis 1560*, Bd. 1, S. 182, 367.

(4) たとえば、一五一九年から三二年まで断続的にカルロスの宮廷に滞在したポーランドの外交官で人文主義者のダンティス

クス (Dantiscus, Johannes von) はたびたびフッガーの代理商から借金をしている。H. Kellenbenz, *a. a. O.*, S. 170 f.

(4 a) たとえば、一五五三年には三七五〇万マラベディ (約一〇万ドゥカード) 分の銀が一旦支払われたのちに取上げられ、一五五七年には四三万ドゥカード分の銀による返済が実行されなかった。H. Kellenbenz, *a. a. O.*, Bd. 1, S. 341, 345 f.

(5) フェリペ二世の治世の金融恐慌の時代にジェノヴァ人は「吸血鬼のように」この保証国債の取引を行って憎まれたといわれている。フッガーはこれを要求しなかったと主張しているが、一五三六年と三七年の一〇万ドゥカードずつのアシエントには保証国債の約定がついている。一五五七年の第一回国庫の支払停止の際に、フッガーへの返済に当てるはずの二口の銀の送り荷 (五七万ドゥカードとも七〇万ドゥカードともいわれる) をフェリペ二世がアントウェルペンで没収して、王室の必要のために転用したことは、フッガーの経営を苦しめた。K. Häbler, *a. a. O.*, S. 121-124; R. Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger*, Bd. 2, S. 163 f.

(6) たとえば、フッガーはエボリ公やグランヴェルの財産を管理したことがあり、トレドの修道院長やメディナ・セリ侯に貸付けたこともあった。また、一六世紀半ば頃に南ドイツからスペイン宮廷へ行く者は、だれでも現金をフッガー家の信用状に換えて持っていたという。K. Häbler, *a. a. O.*, S. 124.

(7) たとえば、一五五五年四月にフッガーはコルドバの商人H・グチエレスに約三六〇ドゥカードを貸付けたが、この商人がサント・ドミンゴに渡航したので、翌年一月に債権回収の全権をサント・ドミンゴの二人に委任している。一五五六年五月に三〇〇〇ドゥカードを貸付けたF・ルコが死んだ時には、債権の回収をプエルトリコ島の総督に依頼している。また、一五五七年二月に約一一五〇ドゥカードを貸付けたF・グリエゴが返済期限直前に渡米しようとした時には、渡米を阻止し、結局、グリエゴと同郷の友人が代って債務の保証をした。銀行が破産した例としては、一五五三年三月のリサラサス銀行の破産と一五五四年一月のトレドの公立銀行の破産がある。H. Kellenbenz, *a. a. O.*, Bd. 1, S. 338, 341, 342, 345, 350.

(8) 宮廷の滞在地や大都市には「銀行」(両替店 *Cambio*) があって、大抵の取引は宮廷で活動していた王室銀行家が間に入っている。一五三〇年代にメディナ・デル・カンポには二〇人以上の銀行家 (両替商) がいた。カルロスの晩年にはロドリゴ・デ・ドゥエーニャスとシモン・ルイスが有名。フッガーはディエゴ・デ・ラ・アヤ、ヘルナンド・デ・オコア、ファン・オルテガ、ルイス・デ・メディナと一緒に仕事をするが多かった。また、フッガーは王室と取引のあった商人の中で住居の提供をうけた唯一の商人であった。H. Kellenbenz, *a. a. O.*, Bd. 1, S. 367, 368; K. Häbler, *a. a. O.*, S. 125.

(9) 初代のハラーは最初は自分一人で、のちには一人の手伝いを使っており、ホエルもスペイン人の弁護士を使っていた。

ヴァルター (Jobst Walther) は一五四二年に支配人となって模範的に勤めて信頼を得ていたが、彼の頃には帳簿係、出納係、書記各一人と数人のスペイン人が宮廷店で働いていた。ライインクはウルムの上流市民、彼の母はアントーンの叔母、つまりアントーンと従弟、ホエルルは南ティロールの出身、リスボンで経験を積み、ネーデルラントでも働いた。ヴァイラーはミュンヘンの都市貴族、クルツはリンダウの出身、カボートの大航海(一五二五年)の頃からセヴィリヤで働き、ユカタン半島へ渡ったこともあった。シュテッヒャーもセビーリヤで経験を積んだ。ホエルマンは一四歳でアントウエルペン店に入り、イギリスへも渡り、レーヴェン大学で学んでスペインへ渡った。Ch・フッガーはアントーンの兄ライムントの三男、つまり甥に当る。ネーデルラントで修業したのちスペインで働いた。ヴァルターはボーデン湖地方の出身、祖父は皇帝の顧問官、弟は皇弟フェルディナンドに仕えた。一五三七年からセビーリヤ店で働き、のち宮廷店を委された。H. Kellenbenz, a. a. O., Bd. I, S. 168-174; K. Häbler, a. a. O., S. 126-7.

三 王室に対する貸付の事例

スペイン王でドイツ皇帝となったカール五世は西欧カトリック世界の守護者をもって任じ、カトリックハプスブルクの秩序を維持するためにフランス王と戦い、北アフリカ遠征を強行し、オスマン・トルコを迎え撃ち、ドイツの新教徒と争った。これらの戦争の連続が戦費調達のために外国人銀行家からの借入を増大させ、スペイン王室財政の破綻を招いたことはよく知られている。⁽¹⁾ R・エーレンベルクは「一五三六年、四二年、四七年、五二年はカール五世にとって、借入金が増加して債務過重に陥る道程の階段であった」と述べているが、⁽²⁾ いずれも大規模な遠征や戦争が行われた年である。このような王室の財政破綻に対してアントーン・フッガーは、事業の清算を図った直後の数年間を除いてほとんど毎年のように、カールからの借入の要請に応じてアシエントを結んで援助を続けた。フッガーが行った貸付については、カランデの研究にもとづいてケレンベンツが年を追って詳細に述べている。⁽³⁾ 以下では紙数の関係もあり、その中からエーレンベルクが述べている財政破綻への里程碑ともいえるべき四つの年を選んで、スペイン

王室に対するフッガーの貸付の一端を明らかにしよう。

1 一五三六年 前年の北アフリカ遠征（一五三五年七月ラ・ゴレッタ要塞攻略、チュニス占領）からイタリアへ帰り、この年四月に初めてローマへ入ったカールは、カンブレの和議（一五二九年）を破棄してトリノへ侵入したフランス王に対抗して、夏にはアステイからプロヴァンスへ五万の軍を進めた。しかし、プロヴァンス遠征ではかえってフランス軍に敗れ、一二月にスペインへ帰った。カールにとってイタリアと南フランスで過ごした一年であった。⁽⁴⁾

カールがイタリアから特使に託してスペインの王妃に送った五月一八日付の手紙が当時の財政状態を知らせている。⁽⁵⁾——パンプローナ、フエンテラビア、サン・セバスチアンの守りを固め、フランスに向けてペルピニャンに集結中の軍隊に給料を支払うために多額の貨幣が必要で、そのためにはどうしてもフッガーとヴェルザーに助力を仰がねばならない。そのほかさらに、艦隊を整備しなければならない。四〇万ドゥカードをバルセロナからガレー船でイタリアへ送るように。また、マエストラスゴの請負額も引き上げが望まれる。……フッガーとヴェルザーにはさらに二〇万ドゥカードの手形を要求した。その返済はペルーの金によって支払われることになるう。

これより前の四月にフッガーの代理商ミューリッヒは、皇帝が滞在中のローマで一〇万金ドゥカードのアシエントを結んでいる。利子は一四％で、これは当時の通常の利率であった。そのほか返済の保証としてフッガーは売上税とカステイリヤの地代によって償還される国債二九四万七、三二一マラベディ（約七八五九ドゥカード）分の特許状を獲得した。一〇万ドゥカードの貸付金は五月と六月に半額ずつトリエントとアウクスブルクで引き渡されることになっていたが、結局、一度に支払われ、五月二二日にトリエントで皇帝の厩長が領収証を出している。この貸付は恐らくプロヴァンス遠征の軍費に当てられたと思われる。

先の手紙から一か月後の六月一八日、皇帝は再度スペインの王妃に手紙を送って、交渉中の一二〇万ドゥカードの

アシエントを早く結ぶように督促している。⁽⁶⁾——このアシエントの締結を成功させるためには、王室が利用できるすべて「の収入」を譲渡し、質入れして、一刻も早く貨幣を送るように、さもないければ皇帝の「臣下も諸国も名誉も」大きな危険に陥ることになる。もう一度一〇万ドゥカードをバルセロナからガレー船で送るように。もっと用立てることができれば、セビーリヤで鑄造されたクローネ貨をありったけ一緒に送るように。

九月一日にオルテンブルク伯はアウクスブルクのフッガー邸に足を運んで、ようやく七万ドゥカードのアシエントの成約にこぎつけた。これはドイツ人傭兵に支払う給料に当てるための金額で、九月二九日に皇帝が批准している。フッガーは利子一四%のほか保証国債一七七万四〇〇〇マラベディ（約四、七三〇ドゥカード）の特権を獲得した。返済は翌年のヴィリャロンの大市で。オルテンブルク伯は九月五日にさらに九万ドゥカードのアシエントを結んだ。今度はいタリアで傭兵を募集するための資金である。しかし、時すでに遅く皇帝軍はプロヴァンスでフランス軍に敗れていた。募集した傭兵は戦うことなく帰郷した。

一五三六年にはもう一度六〇万ドゥカードのアシエントがナポリで結ばれている。この借入金の一部はスペインの収入で返済されることにして、それに当てるためにマエストラスゴ請負契約が九月一六日にヴァリャドリッドで結ばれた。フッガーの代理商はK・ヴァイラー、スペイン側からは王妃や枢機卿が出席した。前年二月に借入れた六〇万ドゥカードと一緒に騎士修道会領からの地代で返済されることになったわけで、一五三八年から四二年までの五年間フッガーが地代の徴収を請負うことが決定した。⁽⁷⁾

2 一五四二年 前年の一五四一年七月末に閉会したレーゲンスブルクの帝国議会で新旧両宗派間の調停に失敗し、周囲の進言を拒けて一〇月に強行したアルジェ遠征に敗れたカールは、八〇〇〇余の将兵と一〇〇隻余の大艦隊を失って一二月初めにスペインへ帰った。明けて四二年の夏フランス国王はカールに対して宣戦を布告した。戦闘は

二年間にわたってフランス東部国境のルクセンブルク、南部国境のペルピニャン、ブルゴーニュ南部のデューレン、サヴォア公国のニース、シャンパーニュ地方のサン・ディージェで交されたが、結局、カールの姉妹の仲介で四四年九月の「クレピイの和」で終結した。⁽⁸⁾

さて、スペインへ帰ったカールはマドリッドへ着くと早速クリストフ・フッガーと借入の交渉を始めた。⁽⁹⁾ 四二年一月一二日にアシエントが結ばれ、五万ドゥカードはフランドルで、一〇万エスクードはドイツとイタリアで半額ずつ支払われることになった。三日後の一月一五日にフッガーはマドリッドで支払を約束した証書を渡し、カールの秘書が受領証を出している。五万ドゥカードは三月二日にブリュッセルで、五万エスクードは三月末にジェノヴァで、最後の五万クローネは七月に支払われた。利子は一三%と定められたが、そのほかにフッガーに手数料として九、五〇〇ドゥカードを払うことになった。借入金はいタリアとドイツで支払われるが、その返済にはスペインの収入を当てることになっていたからである。

カールはトルデシリャスへ寄って母(狂女ファナ)を見舞ったのちヴァリャドリッドへ向かったが、四月初めにヴァリャドリッドで一〇万エスクードの新規のアシエントが結ばれた。半額は三〇日以内に、残りの半額はそれから二〇日以内にイタリア(ナポリ、ジェノヴァ、ミラノ)で支払われることになっていた。前回と同様にフッガーは支払を約束した証書を渡し、カールの秘書がその受領証を出している。手数料は九、〇〇〇ドゥカード、返済に当てる収入として次年度と二年先のカステイリャの特別上納金^{セルビシオ}が指図されていた。これと同時に、期限内にフッガーに返済されなかった以前の三通のアシエント七万ドゥカード余についても計算しなおして、二年先のセルビシオから支払われる旨の命令が出された。

この年にはさらに五月四日にヴァリャドリッドで八万ドゥカードの借入が取決められ、八月にはアウクスブルクで

アントーンとの間で二万九、六〇〇グルデンのアシエントが結ばれている。フランス国王との戦争のためにスペインへ派遣される歩兵と、ミラノとフランドルにいる皇帝の軍隊に対する支払いに当てるためであった。このアシエントにもとづいて二万二、二〇〇ドゥカードが八月と九月にアウクスブルクで支払われた⁽¹⁰⁾。

この年の例が示すように、フッガーと王室との間のアシエントはスペインの各都市ばかりでなく、ネーデルラント、イタリア、ドイツでも結ばれ、借入金を支払地もネーデルラントからイタリアまで広く拡散していた。このように時と所を選ばない、しかも多額の王室の資金需要に応えることができたのは、フッガーのように全ヨーロッパに広く営業網を張りめぐらした国際的金融業者にはじめて可能であった。しかし、そのフッガーについても、貸付の状態を年を追って詳細に述べているケレンベンツは、「アシエントについて明確な一覧を示すことはますます困難になっている。というのは、新しい借入が古い返済義務と合体しているからである」と述べている⁽¹¹⁾。要するに、古い債権を回収するために新たに貸付をしなければならなかったのであり、王室に対する貸付がいわば自転車操業の状態になるうとしていたのであった。

ところで、一五三八年からフッガーが請負っていたマエストラスゴは四二年末で終ることになっていたので、四二年秋には次の請負人を決める入札が行われた。財政難に苦しむ王室は請負額を値上げしてフッガーに請負ってもらったことを望み、騎士修道会もそれに賛成して入札期限を延長した。しかし、結果は最高値をつけたヴァリャドリッドの商人ペドロ・ゴンサレス・デ・レオンが落札して請負人になった。マエストラスゴの請負いという旨味^{うまみ}のある仕事を外国人の手から取戻そうとするスペイン人の勢力がゴンサレスの背後にいたのではないかとケレンベンツは推測している。アウクスブルクに滞在中にこの結果を聞いたフーゴ・アンジェロは、皇帝の秘書に宛てた手紙の中で、フッガーが請負いからはずれたことで、今後皇帝がドイツで負債を返却し、砲弾と火薬を調達することがどれほど困難に

なるだろうか、と危惧の念を表明している⁽¹²⁾。

- (1) 諸田實「スペイン王室の銀行家」『商経論叢』二九—一三六—四一頁を参照。
- (2) R. Ehrenberg, *a. a. o.*, Bd. 2, S. 149.
- (3) H. Kellenbenz *a. a. o.*, Bd. 1, S. 67—122.
- (4) 一五三六年から四二年までの間はフッガーのスペイン王室に対する貸付が最高に達した時期であった。H. Kellenbenz, *Die fremden Kauleute auf der Iberischen Halbinsel vom 15. Jahrhundert bis zum Ende des 16. Jahrhunderts*, in: ders. (Hg.), *Fremde Kaufleute auf der Iberischen Halbinsel*. カール五世の行動については、江村洋『カール五世』(東京書籍、一九九二年)を参照。
- (5) H. Kellenbenz, *a. a. o.*, Bd. 1, s. 75, Bd. 2, S. 17, Anm. 144.
- (6) H. Kellenbenz, *a. a. o.*, Bd. 1, S. 76.
- (7) 諸田「フッガー家による騎士修道会領の地代請負」(『マエストラスゴ』)『商経論叢』三〇—一四三頁。なお、この前年、一五三五年八月にペドロ・デ・メンドーサがリオ・デ・ラ・プラタ地域の征服と植民を目指して出航し、現地にブエノスアイレスを建設した。フッガーも、他の南ドイツ人商人と一緒に、この航海に出資したと思われる。しかし、この出資とフッガーのスペイン宮廷店の活動との関係はよくわからない。
- (8) カール五世の姉エレオノーレはフランス王フランソワ一世の王妃、また、妹マリアはネーデルラント総督であった。
- (9) クリストフ・フッガー(一五二〇—七九年)は当主アントーンの兄ライムントの息子、つまり甥に当る。一五三六年からネーデルラントで修業を積み、三八年にフッガー会社の社員となった。三九年から四四年までスペインで活動した。
- (10) グルデンとドゥカードの間のレートは通常七グルデンに五ドゥカードであったが、このアシエントでは一グルデンが六〇クロイツァー、一ドゥカードが八〇クロイツァー(八四クロイツァーではなく)とドゥカードが割安に定められていた。
- (11) H. Kellenbenz, *a. a. o.*, Bd. 1, S. 81.
- (12) H. Kellenbenz, *a. a. o.*, Bd. 1, S. 82. この時のマエストラスゴ請負入札の経緯については、諸田、前掲稿、一四三—一四四頁。

3 一五四七年 この年はミュールベルクの会戦で新教徒側のザクセン選帝侯の軍隊に皇帝軍が大勝して、シュマ

ルカルデン戦争が決着した年である。この当時、スペインの国庫が極度に苦しかったことは、前年一月のロス・コボスの次の手紙から明らかである。⁽¹⁾——国内の収入もアメリカからの分も、使える金はすべて皇帝が使ってしまった。一五四七年〔翌年〕の分まで収入は使いきった。四七年一月から四八年末まで〔の二年間〕新たな収入はほとんど見込めない。フランス軍が攻めこんできたら、城塞や港を守るために、陸軍やドーリアの船団を装備するために、一レアルも使う金がない。

フッガー家の当主アントーンは前年の四月にドーナウヴェルトのフッガー邸で皇帝カールと会談した。この会談で、フランスやトルコと戦うよりもまずドイツの新教徒と戦うというカールの本心を知ったアントーンは、アウクスブルク市が新教徒側のシュマルカルデン同盟に入ったために会社の中枢をティロールのシュワーツへ移すとともに、戦争の回避に向けて新旧双方への援助を控えようと考えていた。しかし、新教徒側と武力で対決する決意を固めた皇帝はスペイン、フランドル、イタリアで戦費の調達に全力をあげ、結局、七月初めまでに五三万グルデン（約三八万ドゥカード）をフッガーから借入れた。

四七年の年初をアウクスブルク近郊のシュミーヘンで迎えたアントーンはアウクスブルク市と皇帝との和解を斡旋するためにネッカー河畔へ騎行し、エスリンゲンでアルバ公と、マールバッハでグランビルと会い、ハイルブロンで皇帝に謁見することができた。一月二五日にウルムへ着いた皇帝はここでアントーンと会談したが、フッガーは二日後の二七日に一二万二、四七七グルデン（約八万七、五〇〇ドゥカード）のアシエントを結び、さらに、二月一五日には同じウルムで二万エスクード（約二万七、〇〇〇グルデン）を貸付けている。三月初めにはヴェルザーも一〇万グルデンの貸付を約束した。⁽²⁾

三月までニュルンベルクに滞在した皇帝は三月末に北へ旅立ち、四月二四日エルベ河畔のミュールベルク（マイセン

表1 フッガーの皇帝側への貸付 (1546年5月から1547年5月まで)

日 付	取引の形態	受領者	金 額	相 場
1546年 5/6月	為替手形, スペインからドイツへ	皇 帝	15万ドゥカード	80クロイツァー
	為替手形, スペインからジェノヴァへ	皇 帝	15万クローネ	90クロイツァー
	為替手形, ドイツからナポリへ	皇 帝	7万クローネ	90クロイツァー
1546年 7月末	貸付 (寄託), アントウェルペンで	皇帝に代ってド ウッチ	41961 フランド ルポンド	240グロッシェ ン
1546年 10月11日	貸付, 同様の金融取引で	ネーデルラント宮 廷	10万ドゥカード	65グロッシェン
1546年 11月	不 明	皇 帝	3万クローネ (?)	72グロッシェン (?)
1547年 1月27日	為替手形, ネーデルラント宛 て	皇 帝	122477 グルデン	53グロッシェン
"			2万クローネ	72グロッシェン
1547年 5月16日			6万グルデン	53グロッシェン
1546年 7月2日	貸付, ウィーン, ニュルンベルクおよびレーゲンスブルクで	フェルディナンド 国王	11万グルデン	60クロイツァー
1547年 3月29日	貸付, ウィーンとニュルンベルクで	フェルディナンド 国王	3万グルデン	60クロイツァー
1546年 7月15日	貸付, シュワーツで	インスブルック政 府	1万グルデン	60クロイツァー
1546年 9月	短期貸付 (ソコロ)	スペイン政府	55000 ドゥカ ード	82クロイツァー (?)

の北約二〇キロ)でザクセン選帝侯の軍隊を破り、五月にヴィッテンベルクを包囲してハレの城内に一二日間滞在したのち、ヘッセンのフィリップ方伯が降伏すると南ドイツへ戻り、七月二三日にアウクスブルクのフッガー邸へ入った。九月一日に開かれた帝国議会は「甲冑に鎧われた国会」といわれているが、新旧両派間の仮協定^{インテリム}が承認された。インテリムは翌四八年六月三〇日に布告される⁽³⁾。このミュールベルクの会戦のために南ドイツの銀行家がどれだけ援助したか、詳細は判らない。ジェノヴァ人の銀行家は少なくとも三〇万ドゥカード提供したといわれているが、ヴェネツィアの外交官が伝えたところでは、アントーンは五〇万エ

スクードを皇帝に貸付けたということである。⁽⁴⁾

シュマルカルデン戦争に関連して一五四六年五月から四七年五月までにフッガーが皇帝側に提供した貸付については、H・J・キルヒが作成した一覧表がある(表1を参照)⁽⁵⁾。これらの取引は、政治的・軍事的に緊急の借入を迫られていた借手にとっても、また、営業の危険を避けるために借入要請に応じざるをえなかった貸手にとっても、止むをえない強制された取引の「悪循環」であった。

一五四六年夏の皇帝への貸付は手数料九%、利子一四%、返済の財源としてマエストラスゴ、教会領の臨時地代、十字軍税と確実な収入が指図されていたから、貸手^{フッガー}にとって有利な条件であった。⁽⁶⁾これに対して、国王フェルディナンドへの貸付は手数料八%、一〇年間無利子でその後五%と条件ははるかに悪かった。市場利子率の変動もあったかもしれないが、経済外的な要因に左右されやすい政治的貸付の特色であろう。

これらの貸付金を調達するために、フッガーは各支店に保管されていた現金や鑄造されていない銀地金を掻き集めたようである。⁽⁷⁾四六年七月のインスブルック政府に対する貸付は大部分がシュワーツの銀地金で行われた。自己資金だけで足りない場合は利子をつけて外部の資金を受入れた。四六年六月にナポリで支払うことになっていた七万クローネの貸付の場合には、自己資金は二万四〇〇〇クローネにすぎなかった。四六年末の決算では「手形帳」(確定利子付預金帳)の負債、つまり外部の資金の受入額は六九万四〇二六グルデンで、二七年の決算に較べて二・四倍にふえている。負債の大部分は民間人がフッガーに寄託した小額の資金であるが、初期のスペインの取引のようにヴェルザーが出資した分もあった。

これに関連してフッガーの貨幣取引の形態について若干補足しておこう。四六年七月末の取引のように、四〇年代後半にはアントウェルペンで商人・銀行家の間で出資金の寄託と受入が盛んに行われていた。こうした貨幣取引の多

くは大手の際に結ばれ、四六年のフッガーの決算では秋のパマス大手（支払期日は一月一日）で受入れた金額が五万五二二〇リーブル（三万四八七〇グルデン）記載されている。但し、このうちどれほどが皇帝との取引に係る金額であったかは判らない。調達した貸付金を支払地まで現金輸送した場合もあったが、大抵は為替手形による送金であった。⁽⁸⁾

一五四六年の六月と七月の多額の貸付金を用意するために行われた為替手形の取引はフッガーの本店の商用通信文から窺うことができる。⁽⁹⁾ この時期には多数の為替手形がアウクスブルクとニュルンベルクへ送られてきている。たとえば、六月二三日にヴェルザーはリヨンで振出された八、二六四½クローネの手形を引受けている。そのうち二、〇〇〇グルデンをアウクスブルクで、残りをニュルンベルクで支払うことになっていた。手形の振出地はアントウェルペンが多い。六月二六日にアントウェルペンからアウクスブルクのヴェルザー宛ての一万グルデン余の手形が届き、彼は現金をニュルンベルクで支払わせている。六月二八日に番頭のザウエルザップはピメル家宛ての為替手形を受取り、二万グルデンをニュルンベルクで、五、〇〇〇グルデンをアウクスブルクで支払った。同日レーリングは三、〇〇〇グルデンの手形を引受けて支払っている。レム家はニュルンベルクで二、〇〇〇グルデンと一、三〇〇グルデンの二口^{ふたぐち}を出資。二人の商人宛ての二通の手形がフッガーのもとに届いた。額面は一万五、〇〇〇グルデンと一、二〇〇グルデンで八月一五日と二二日の支払期限である。しかし、その一人シェーバーは危険な「時勢」を理由に引受けなかった。その手形は七月七日にアントウェルペンへ送り返された。七月三日にアントウェルペンから三通の為替手形がアウクスブルクへ届いた。さらに、アントウェルペンからニュルンベルクへ、スヘッツ家を通して一万五、〇〇〇グルデンが、モイティンク家を通して六、〇〇〇グルデンが送金された。七月に宮廷店の責任者クルツは出来るだけ多くの貨幣をレーゲンスブルクからニュルンベルクへ送るように、即ちニュルンベルクのフッガー店宛てに振

出す約定でレーゲンスブルクで借入れることを指図された。次の例はもっとこみいった手形取引の一例である。七月半ばにフッガーはナポリで二万四、〇〇〇クローネを払込むことになっていた。そこでクルツはレーゲンスブルクから二、〇〇〇クローネをナポリへ送金し、残りの二万二、〇〇〇クローネをアントウェルペン宛てに振出した。手形の買手は二万四、〇〇〇クローネをナポリでフッガーに支払い、それと引代えにレーゲンスブルクで二、〇〇〇クローネを、アントウェルペンで二万二、〇〇〇クローネを受取った。

一五四七年中の貸付について、ケレンベンツはこのほか次の二件のアシエントが結ばれたと述べている。⁽¹⁰⁾ 八月に約二二万四、〇〇〇ドゥカード、九月に二〇万八、〇〇〇エスクード（三万四、〇〇〇ドゥカード）で、後者は契約の締結は一〇月一九日までであったが、先に七万八、〇〇〇エスクードが前払いされたという。さらに、ネーデルラント総督マリアに対する三〇万ドゥカードの貸付にもフッガーは参加していたようである。

(一) H. Kellenbenz, a. a. O., Bd. I, S. 88; G. F. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, Bd. 2, II, S. 137-138. ロボスはこの手紙で、マエストラスゴの賃貸だけが一筋の光明で、財力のあるフッガーなら一五万ドゥカードで請負ってくれるだろうと、フッガーを推薦している。実際にはフッガーが一六万三、〇〇〇ドゥカードで一五四七年から四年間請負った。

(二) 一五四六年のレーゲンスブルクの国会（六月五日開会、七月二四日閉会）でザクセン選帝侯とヘッセン方伯の追放令を布告し、秋には新教徒側の同盟軍を南ドイツで破り、皇帝は新教徒側についた南ドイツの帝国都市（ウルム、アウクスブルク、ディンケルスビュール、ハイルブロン）に懲罰を課した。アウクスブルク市の賠償金は一五万グルデンと大砲一二門、しかし実際には皇帝の顧問官への贈り物が加わってもっと多かった。フッガーとヘルプロットが一〇万グルデンを用立てた。なお、一五四六年一月二八日付のネーデルラント総督マリアから皇帝への手紙は南ドイツ商人の財力を示す興味深い史料である。すなわち、皇帝が新教徒側についたヘッセン方伯とザクセン選帝侯の臣下、およびアウクスブルク、ウルム、フランクフルトなど同じく新教徒側についた都市の市民にネーデルラントとの取引を禁止するように命令したのに対して、総督は、もし皇帝のこの命令が実行されたらそれはアントウェルペンの商業の繁栄の破滅を意味するとして、反対したのである。J. Strieder, *Aus Antwerp-ener Notariatsarchiven*, S. XXI. 諸田、前掲書、九三—一〇〇ページ。

(3) アウクスブルクで一三六八年から一八〇年間続いたツンフト市政が皇帝の干渉によって崩壊したのは、インテリムが布告された直後の八月三日のことであった。

(4) R. Ehrenberg, *a. a. O.*, Bd. I, S. 168 f.; H. Kellenbenz, *a. a. O.*, Bd. I, S. 93.; H. J. Kirch, *Die Fugger und der Schmalkaldische Krieg*, S. 86, Anm. 2.; G. F. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, Bd. 2, II, S. 442-3.

(5) H. J. Kirch, *a. a. O.*, S. 101.

(6) H. J. Kirch *a. a. O.*, S. 13 f.

(7) ティロール銀山の中心、シュワーツ支店を預るローナーは、しばしば本店からそうした命令を受けていた。H. J. Kirch, *a. a. O.*, S. 105.

(8) H. J. Kirch, *a. a. O.*, S. 106. 現金輸送の例は、一五四六年六月初めプレスラウからウィーンへ四、〇〇〇ドゥカード、一月エルフルトからニュルンベルクへ四、〇〇〇ドゥカードなど。

(9) H. J. Kirch, *a. a. O.*, S. 106f.

(10) H. Kellenbenz, *a. a. O.*, Bd. I, S. 93 f. フッガーの資金力がシュマルカルデン戦争の結果を左右したことにについて、キルヒは次のように述べている。「フッガー家の財力が戦争の成りゆきに及ぼした影響は、戦争の開始時における装備のための巨額の貸付にあった。戦争の開始当時には皇帝とカトリックの命運はフッガーの手中にあった。」皇帝側が優勢になると、他の商人も皇帝に資金を提供するようになった。フッガーの果たした役割としては、皇帝側を積極的に支援したことに劣らず、シュマルカルデン同盟側（新教徒側）からの借入要求を拒絶したことが大きかった。同盟側が軍資金不足のため一五四六年秋の南ドイツの戦闘で敗れたことが、シュマルカルデン戦争の帰趨を決したというのである。H. J. Kirch, *a. a. O.*, S. 109 f. なお、同じ一五四七年には一月にイギリス国王ヘンリー八世が、また、三月にフランス国王フランソワ一世が死去している。

4 一五五二年 一五五二年は皇帝にとって最悪の年であった。前述のように、シュマルカルデン戦争で新教徒側の同盟軍に大勝した皇帝は、一五四七年七月から一年余の間アウクスブルクのフッガー邸に逗留し、四八年秋から一年八か月ブリュッセルに滞在したのち、五〇年七月にふたたびアウクスブルクのフッガー邸に入って、五一年一月にインスブルックへ発つまで一年四か月逗留した。四年四か月の間に二年半以上もフッガー邸に居たわけで、アウク

スブルクのフッガー邸は皇帝の宮殿のようであった。皇帝カールとローマ王でオーストリア大公（ハンガリー、ボヘミアン王）である弟のフェルディナンドとの間の帝位の継承と領土の分割に関する話し合い（一五五〇年九月調停失敗、五年春成立）も、その結果にもとづく皇子フェリペのイタリア、ブルゴーニュ、ネーデルラント、スペイン領の継承（一五五一年三月八、九日）も、この間にアウクスブルクのフッガー邸で行われた。もっとも、当主のアントーンはこの間アウクスブルクを離れ、皇帝とは顔を合わせなかったといわれる。

さて、ザクセン公モーリッツは先のシュマルカルデン戦争では、選帝侯位の獲得という条件に釣られて新教徒の同盟側を裏切って皇帝側に寝返ったが、五二年二月一五日にフランス国王アンリ二世と密約を結ぶことに成功する⁽¹⁾、今度は皇帝に対して態度を翻して宣戦を布告し、皇帝の滞在するインスブルックへ攻めのぼった。四月一九日から五月一日まで皇弟フェルディナンドとモーリッツとの会談がリンツで開かれたが和睦に至らず、五月二六日に再度パッサウで会談を開くことになった。ところが、モーリッツはその間に軍を進め、五月一八日にフェッセンを占領、エレンベルク峠を突破して五月二三日にインスブルックへ入城した。不意を突かれた皇帝は僅かな従者とともに五月九日の深夜にインスブルックを脱出、ブリクセン、リエンツを経て五月二七日にケルンテン地方のフィラッハへ落ちのびた。皇帝にとって屈辱の逃避行であったが、この逃避行には当時インスブルックにいたアントーン・フッガーも同行している。そして、後述するように、五月二八日にフィラッハで約四〇万ドゥカード（約五六万グルデン）という巨額の貸付を約束して、「年老いた、病弱の、疲れ切った皇帝」の苦境を救ったのである。

一方、一五五二年にかけてのこの数年間はフッガーにとっても事業の重大な転換点であった。当主のアントーンは先代の叔父ヤーコプの死後二〇年余の間事業を引継いで発展させてきたが、この頃には商売をやめて会社を解散しようとうと真剣に考えていた。無謀な膨張政策を続けるハプスブルク家との泥沼にはまったような結びつきから脱けだすた

めと、自分の年令が五〇歳を過ぎたのに会社の将来を託すにたる活力と才覚のある人材が一族の中にいないこと、それがおもな理由であった。四六年末に事業全体のくわしい総決算を作成し、四八年七月に利益金を社員に分配し、残りの資産も五〇年末までに処分するはずであった。⁽²⁾しかし、アントーンが遺言状に記しているように、『長びく戦争のために、商売を中止して負債を取り返すことができないばかりか、皇帝と国王を助けるためにもっと多くを貸付け、貨幣を受入れて借金までしなければならぬ、という困難な方向へ事態は進んだ』のであった。⁽³⁾

一五四八年八月に一五万ドゥカードを貸付けてから、アントーンは皇帝からの借入要請を断わっていた。五一年夏の終りにアントーンは六、〇〇〇エスクードを、さらにヴェルザーと共同で四万五、〇〇〇グルデンを貸付けている。一〇月に皇帝がインスブルック（ローマ）行きの旅費（宮廷の移動費用）を要請した時に南ドイツ商人は共同で七万六、〇〇〇ドゥカードを貸付けたが、フッガーはこれに会社の勘定で三万三、〇〇〇ドゥカード、アントーンの個人勘定で二万ドゥカードを出資している。新教徒側の最後の砦となったマクデブルク市を攻撃するために五一年末に皇帝が軍資金を要求した時には、フッガーをはじめアウクスブルクの商人は貸付を断わっている。皇帝が返済のために確実な収入を指図することができないことを、商人は見抜いていたのである。金を借りることも軍隊を集めることもできず、皇帝はインスブルックで心痛の極みであった。『商人たちの間でこれ以上余のために奉仕しないことを申し合わせているように思われる。アウクスブルクでもその他の所でも、どんな優遇「条件」を提供しても、余に金を貸そうという者は一人もない。⁽⁴⁾』シュマルカルデン戦争以来の無暴な財政政策のつけが表われていたのである。選帝侯となつたモーリッツが皇帝に叛旗を翻してインスブルックに迫ってきた時、皇帝はこういう状態であった。

アントーンもまた、南ドイツの戦争、フランクフルトの春の大手の中止、現金の不足を理由にあげて皇帝の借入要請を断わっていた。万策つきた皇帝はアントーンに自筆の書簡（三月三〇日付）を送って、大至急インスブルックへ来

るように懇願した。『これこそは、現在、余の最後の願いである。』この手紙を受けると、アントーンはためらうことなく即座にインスブルックへ向かった。皇帝の権威に対するアントーンの恭順な心情が表われたのか、それとも、スペインの事業に投資した莫大な資産を考えると、ハプスブルク家と手を切ることはできなかったのであろうか。

四月七日からインスブルックで侍従のエラツソとアントーンとの間で多額の借入に貸付交渉が始まった。交渉がまとまらないうちに、前述のようにモーリッツ軍の攻撃を受けて宮廷はインスブルックを逃れることになり、結局、五月二八日に落ちのびた先のフィラッハで、未払いの旧債権を含めて、四〇万ドゥカード（約五六万グルデン）という巨額のアシエントが結ばれた。甥たちの反対が強かったのでアントーン個人の勘定であった。返済の保証にはスペインの騎士修道会の特別上納金^{セルビシオ}、十字軍税^{クルサド}、その他教会領収入、セビーリヤのインディアス通商院の金銀在庫と今後運ばれてくるはずの財宝、国債^{フイロ}が当てられることになった。その他にフッガーは、貸付額に相当する鑄貨もしくは貴金属を免税扱いでスペインから持出す許可を獲得した⁽⁵⁾。もっとも、この時にすでにスペインの収入は翌年（一五五三年）の分まで、一部は五四年の分まで使われていたという。ともあれ、一五一九年の皇帝選挙の時には先代のヤーコプが五四万グルデン余を貸付けて、スペイン王であったカルロスをドイツ皇帝につけたが、一五五二年のフィラッハへの逃避行ではアントーンが五六万グルデンを貸付けて、この皇帝の晩年の苦境を救ったのであった。「皇帝カール五世の治世には、その最初と同様にその最後にも、フッガーという名前の消えることのない刻印が刻みつけられている⁽⁶⁾。」

フィラッハの四〇万ドゥカードのアシエントのうち、二五万ドゥカードはフランス国王との戦争（メッツの攻防）のために五二年の一月に支払われた。この年の秋にはアメリカからこれまでにない大量の銀がジェノヴァとアントウェルペンに到着し、フッガーも多額の銀をスペインから持ち出すことができた。そのためか、この年にはさらにスヘッツ兄弟と共同で六〇万ドゥカードのアシエントを結んでいる。翌年夏セゴビアでフッガーの代理人ヴァルターが

王室側と交渉して合意したところによると、一五五三年夏の時点で王室（皇帝）に対するフッガーの貸付金のうち返済が未済の分は約六一万七、四〇〇ドゥカード（元金四六万三、〇〇〇ドゥカード、利子一五万四、四〇〇ドゥカード）であった。⁽⁷⁾このあと、フッガーの金融業はアントウェルペンの取引所を舞台に、折からの投機熱の渦の中で、主人の指示を守らない代理人オエルテルによって盛んに行われるが、五七年のスペイン王室とフランス王室の支払停止、国庫破産に始まる世紀末の国際的金融恐慌に見舞われて、大きな打撃を受けることになる。

一方、メッツの攻略に失敗した皇帝は五三年一月にブリュッセルに退き、二年後の一五五五年には弟のフェルディナンドに全権を託してアウクスブルクの国会で新旧両教徒の同権を認め（九月三日）、一〇月にはネーデルラントの統治を息子のフェリペに譲り、続いてスペインの王位を、さらにドイツの帝位を退いて、翌年スペインへ引上げる。そして、ユステの修道院に隠退し、二年後の五八年九月に死去した。

(1) この密約（「シャンボールの密約」）は、帝国領の都市メッツ、トゥール、ヴェルダン、カンブレをフランス王に割譲すると引代えに、フランス王から援助金（皇帝との戦いの軍資金）を獲得するという内容であった。皇帝にとってメッツは、南ドイツとブルゴーニュからネーデルラントへの通行路を確保するための要衝の地であった。この密約の時期については、五一年一月とする説、五二年一月とする説がある。

(2) 一五四六年の決算では資産が約七一〇万グルデン、負債が約二〇〇万グルデン、差引き営業資本は約五一〇万グルデンで、この金額はフッガー会社にとって最大の額である。この営業資本の額から期首（一五三九年）の資本を差引いた七年間の利潤は二九一万四、一四三グルデンであるが、このうちスペイン取引の純利益（一四六万一一五五グルデン）が約五〇％、ハンガリー取引の純利益（一一七万三三九四グルデン）が約四〇％を占めている。また、資産約七一〇万グルデンのうち貸付金が約三九〇万グルデン（約五五％）で、その中ではスペインの貸付金（約二〇〇万グルデン、その大部分は皇帝に対する債権）が第一位、アントウェルペンの貸付金（約八〇万グルデン）が第二位を占め、両者を合わせると貸付金の七〇％以上であった。この二九〇万グルデン余の当期利益金のうち約二〇九万グルデン（約七二％）が一五四八年七月末日に社員に分配された。R. Ehrenberg, *a. a. O.*, Bd. 1, S. 144f.

(c) R. Ehrenberg, *a. a. O.*, Bd. I, S. 149. アントーンは一五一七年と五〇年に遺言状を、一五五四年と六〇年に遺言補足書を作成している。こうして、アントーンは一度は事業の清算を決心したのであるが、債権を回収するためには借入要請を断りきれない、という事情もあって、結局、フッガーは新しい取引に引きずりこまれ、これがフッガーを没落へ導くことになる。一五四〇年代後半以降のフッガーの取引には二つの特色が認められる。その一つはイギリス王室に対する貸付である。フッガーとイギリス王室との最初の取引は一五四五年九月であるが、四六年末の決算では、アントウェルペンの債権約八〇万グルデンのうちイギリス王室に対する債権が約三五万四、〇〇〇グルデンで第一位を占めている。もう一つは、これまでフッガーにとって、香辛料の買占や銅の販売など、東インド貿易に関連する商品取引の市場であったアントウェルペンが、いまや貨幣取引（寄託金の受入れと貸付）の中心地として重要性をましたことである。四六年末の決算では債権は約八〇万グルデンでスペインのそれについて第二位、負債は約四六万グルデンでスペインのそれよりはるかに多く、他の南ドイツ商人から多額の資金を寄託金として受け入れていたことを示している。

(4) R. Ehrenberg, *a. a. O.*, Bd. I, S. 152.

(5) R. Ehrenberg, *a. a. O.*, Bd. I, S. 152 f.; H. Kellenbenz, *a. a. O.*, Bd. I, S. 98 f.

(6) R. Ehrenberg, *a. a. O.*, Bd. I, S. 152.

(7) 返済には、アメリカからの金と銀一〇万ドゥカード、国債七一四〇ドゥカード、一五五五―五七年間の十字軍税^{クルサード}二万八、〇〇〇ドゥカード、同じく一五五五―五七年間の特別上納金^{セルビシオ}三九万ドゥカードが指図され、その他にフッガーは二二万二、五〇〇ドゥカードの銀の輸出許可を獲得した。H. Kellenbenz, *a. a. O.*, Bd. I, S. 102. この当時、フッガーの資金繰りは相当苦しかったらしい。五二年七月から同年末までの間に約一〇社のアウクスブルク商人から約七万グルデンを借入れている。五二年以降スペイン王室（皇帝）の銀行家の中では、ジェノヴァ人がフッガーを抑えて優勢となり、フェリペ・スピノラをはじめスピノラ一族と、セビーリヤ在住のジェノヴァ人銀行家の中で最大の資産家といわれたコンスタンテン・ジェンティーユの活躍が目立っている。フッガーはネーデルラント総督マリアとの関係がしっくりいっていなかったため、対フランス戦の資金調達ではアントウェルペンにおける皇帝の代理人になったガスパル・スヘッツがマリアの銀行家の中で首位を占めていた。なお、一五五三年には国教会の新教化を進めたイギリス国王エドワード六世が七月に死去し、熱烈なカトリックのメアリ一世が王位についたので、フェリペは英女王メアリと結婚している。